北欧ブランドが提唱するネットワーク再生 ハイエンドならではの豊かな質感を実現

BEST HiFi Components
2022 AUTUMN

Profile ¦ ノルウェー発のハイエンドオーディオ・ブランド、エレクトロコンパニエよりネットワークミュージックプレーヤーが上陸した。マークⅡという位置付けの本機。従来モデルよりも音質面や機能面がさらに強化されたという。TidalやSpotify、QobuzのダイレクトRe生に加え、AirPlay、DLNA、Bluetooth経由での送り込み再生も可能。さらに、ネットワーク上の音楽コレクションの再生や本機自体にハードドライブを組み込むことも可能。独自のアプリ「EC PLAY」で操作性も高く、ハイエンドネットワークプレーヤーの強力な選択肢のひとつとなることは間違いない。

Text by
山之内 正
Tadashi Yamanouchi
Photo by **田代法生**

ELECTROCOMPANIET
ECM 1 MKⅡ

ネットワークプレーヤー

Specifications

●チャンネル数:2ch●出力インピーダンス:300Ω●ノイズフロア:<−145dB●周波数レスポンス:0.5〜48kHz●全高調波歪み+ノイズ:<0.0005%●アップサンプリングレート:192kHz／24bit●2×S／PDIF同軸入力:192kHz／24bit●2×S／PDIFTOS入力:192kHz／24bit●ネットワーク接続:WiFiまたはLAN●内部ドライブ:ドッキング、セルフインストール(3.5型／2.5型-容量無制限)●消費電力:負荷あるいは信号無し=50W、スタンバイ=0.5W●サイズ:470W×381D×80Hmm●質量:8.3kg(内部ドライブを除く)●取り扱い:シーエスフィールド(株)

洗練されたデザインに豊富な機能、高い拡張性

ノルウェーのエレクトロコンパニエからネットワークストリーマー「ECM・1MkⅡ」が登場した。同社のアンプやCDプレーヤーと共通の洗練されたデザインを身にまとい、操作インターフェースもシンプルの極み。とはいえデジタル入力をそなえたDACとしても機能し、ボリューム回路も内蔵するなど、見かけによらず機能は豊富だ。また、本体内にストレージを内蔵できるなど、拡張性も高い。ネットワークオーディオの愛好家が多い北欧のブランドがどんなスタイルを提案するのか、非常に興味深い。

本国のラインアップにはリビングとクラシックの2シリーズが揃うが、本機は後者のネットワークストリーマーとして開発された製品で、メーカーは「ミュージックストリーマー」に分類する。その名の通りWiFiまたはイーサネット経由でのストリーミング再生とNASからのネットワーク再生を中心に据えているのだ、PCMは最大192kHz／24bit、DSDは5・6MHzと対応フォーマットは控えめだが、TIDALやQobuzをメインに使うなら不満はない。MQAのデコードには非対応だが、RoonReadyに準拠する。

デジタル入力は同軸と光各2系統をそなえ、PCM192kHz／24bitまで対応。USB-B入力はないのでパソコンやミュージックサーバーのUSB接続には使えないが、背面パネルのUSB-A入力はUSBメモリーまたは外付けドライブを認識し、DSDファイルも含めてハイレゾ音源を再生できる。

ストリーミング再生用のソフトウェアと操作アプリいずれも自社開発とのことで、設定と基本操作はアプリ「EC PLAY」で行う。機能は豊富で操作のレスポンスも良好だが、内蔵ボリュームをオフにする機能が見つからなかったので、最大値に設定した上でプリアンプとのバランス接続で試聴を進めた。アナログ入力はないのでプリアンプとしての機能は限定的だが、パワーアンプやアクティブスピーカーとの組み合わせではアプリ、本体、リモコンで音量調整ができる。

フロントパネル右側に配置されたカーソルキーは音量の上下と入力切替に使用する。選択した入力が左側のディスプレイに表示され、LAN／WiFi入力時は「Tidal」などストリーミングサービスの名称を表示。曲名など詳細はアプリの画面で確認するのが基本だ。

ストレージの追加はユーザーが行うことを前提にした設計で、作業は難しくなさそう。底板にネジ止めされたパネルを外し、HDDまたはSSDを取り付けるだけで認識し、自動的にフォーマットされる。2・5インチと3・5インチどちらも対応し、容量に制限はないとのこと。音源を追加した場合はアプリのデータベース更新が必要だ。

繊細を極めた美しい余韻 澄み切った中低域が魅力

まずはNASのネットワーク再生とUSBメモリからのデータ再生で基本性能を確認した。ツィンマーマンが弾くベートーヴェンはどの音域にも付帯音が乗らず、中低音が澄み切ったピアノとのハーモニーに混濁がない。帯域バランスは低重心だが過剰な重さはなく、ピアノの切れの良さに好印象を受けた。ソプラノ独唱は息遣いと弱音の濃密な表情をもらさず引き出し、余韻に溶け込み消え入るようなピアニシモが繊細をきわめる。セリアのヴォーカルは個性的な音色を忠実に再現し、ヴィブラフォン、キーボード、パーカッションなど次々に現れる楽器の鳴らし分けもきめが細かい。ベースは立ち上がりが俊敏で付点音符の切れも良好。ヴォーカルとリズムの関係を立体的に描き出すことにも感心させられた。

TIDALとQobuzはECPLAYで選曲し、Spotifyは専用アプリが開いて選曲するが受信は本体で行う仕組みだ。TIDALで再生したラトル指揮ロンドン交響楽団のストラヴィンスキー《春の祭典》は、CDフォーマットの枠を超えるほどの広大なダイナミックレンジと複雑なリズムの動きがすべて浮かび上がる解像度の高さがあり、ハイエンドのネットワークプレーヤーならではの豊かな質感を聴き取ることができた。

Bluetoothが使えてAirPlayも標準対応するなど、日常的にSpotifyを楽しむ用途でも手軽に使えるが、再生音のポテンシャルを考えると、それだけでは本領を発揮しているとは言えない。グレードの高い再生システムに組み込み、高音質ストリーミングとNASのネットワーク再生を中心にハイレゾ再生に活用することで本機の真価を引き出すことができる。

本機のリア部。入力は同軸とTOSが各2系統、ストリーミング・セクションとしてLANと同軸、USB-A入力を装備する。外部ドライブは底板にネジ止めされたパネルを外して組み込めるようになっている